

科学研究費基盤研究(C)

## 「『適合的因果』と統計的因果推論の同型性にもとづく 因果分析の再構築」

研究代表者：佐 藤 俊 樹

本年度の最大の成果は、本研究助成そして昨年度までの研究助成「ベイズ統計学的枠組みによる理解社会学と意味システム論の再構築」によって、書下ろしの著書を刊行できたことだろう。佐藤俊樹『社会科学と因果分析』（岩波書店、2019年）である。

本書はマックス・ウェーバーが社会科学に導入した「適合的因果」と呼ばれる方法論が、現在の統計的因果推論の原型にあたることを示し、それが社会科学や歴史学など、因果という形で人間の営みを考察する学術にどんな意味をもつのかを考察したものである。

ウェーバーによるこの方法論の提唱は、19世紀ドイツ語圏の歴史学を代表する一人、E・マイヤーへの批判であるだけでなく、今なお文科系／理科系の学術の代名詞として使われる文化科学／法則科学の対立図式そのものをのりこえるものであった。それゆえ、社会科学の比較研究や因果分析だけでなく、歴史学や地域研究にとっても重要な意味をもつだろう。例えば「世界システム」や文化研究といった「新しい」研究手法が、実はすでに100年以上前に試されて、その可能性と限界が確認されていることもわかる。